

「解体」するメタ短歌 安田百合絵

齊藤斎藤の歌集『渡辺のわたし』が、出版社「港の人」より新装版として再版された。二〇〇四年に刊行されてからおおよそ十二年の歳月を経て、まったく古びない。というより、この数年の間に歌壇で話題になった論点などを考えあわせると、きわめてアクチュアルな問題作であることがあらためて実感されてくる。

阿波野巧也が新装版の解説で強調しているように、この歌集は徹底して「わたし」の不確定性を示す。『渡辺のわたし』から濃厚に立ちのぼる暴力性は、短歌を支えている機構そのものをパロディ化することで、それを解体してしまうことのうちにあるのだろう。短歌的な一人称性の破壊は、おそらくそこでパロディとして示されている機構の要素のひとつにすぎない（最も重要な要素であることは疑いをいれないが）。

・このうたでわたしの言いたかったことを三十一字であらわしなさい

・蛇口をひねりお湯になるまで見えている——そう、ただ一人だけの人の顔が

・母さんがふとんを叩く「母さんがふとんを叩くと感じるのですね」

一首目、「わたしの言いたかったことを三十一文字であらわしなさい」という命令は、よく考えれば袋小路にはまり込んでしま

う。この歌の言わんとすることを「三十一字であらわす」ためには、この場合この歌を繰り返すしかないからだ。問い自身が歌の内容であるために、「言いたかったこと」は空疎な問いそのものにしかなりえず、問いと答えが同一になることで、互いに映しあう合わせ鏡のように無限反復が生じる。恐ろしい歌である。

しばしば引用される二首目は、岡井隆の（同じく無数に引用されてきた）評論の一節をとったものだが、岡井が評論中で「ただ一人だけの人の顔」という表現で指しているのはほかならぬ「私性」である。もちろん、蛇口から出てくる水に映るのは水にゆらめく顔であり、「私性」なる概念が見えるはずもない。「水にうつる顔」と「私性」という存在と非存在とが、岡井の文章の引用を通じてレトリカルに結びつき、それは「私性」という概念の問い直しへとつながってゆく。

三首目にいたっては、短歌を支える機構だけにとどまらず、現実世界の枠組みまでもが（ほとんど認識論的な）アイロニーのうちに破壊的な危うさを孕んでくる。一言で言うならば『渡辺のわたし』のこうした歌群はメタ短歌とも呼ぶうるものであり、こうした歌の可能性については再考の余地があるう。

また、今年の角川短歌賞を、佐佐木定綱さんが受賞された。受賞作「魚は机を濡らす」がこれから様々なすぐれた読み手によって論じられることを期待したい。個人的には、久々に選考討論をじっくりと読んで、選評のなかで「描かれていること」がほとんどそのまま「作者の実際的な事実」として認識され続けていることに少し驚きもあった。一連の議論で読み方がどのように変わってゆくのか、あるいは変わらないのか、引き続き注視したい。